

- 1 石黒病院長退任ご挨拶
常に最先端をいく病院を目指して、
変わり続けることが使命。
・名古屋掖済会病院の北川氏が特命病院長補佐に就任
・教えて！この言葉「緑内障」
- 2 専門看護師のご紹介
・新任のご挨拶
・退職・退任のご挨拶
・ナデック通信
- 3 名大病院臨床研修医のご紹介
・平成30年度名大病院災害訓練を実施

- 4 診療科レポート「親と子どもの心療科」
・特定基金 医学部附属病院支援事業へのご協力をお願い
・ボランティアさん募集
- 4 クラウドファンディングプロジェクトへのご支援のお願い
・健康講座「手術前には筋肉を鍛えましょう！」
・ミニニュース
・禁煙のお願い
・かわらばん HPのご案内

別紙特別号 国立大学病院初
名大病院が JCI 認証を取得しました！

名古屋大学医学部附属病院

理念 ● 診療・教育・研究を通じて社会に貢献します。

基本方針 ● 1. 安全かつ最高水準の医療を提供します。 2. 優れた医療人を養成します。
3. 次代を担う新しい医療を開拓します。 4. 地域と社会に貢献します。

〒466-8560 名古屋市昭和区鶴舞町65番地 TEL 052-741-2111 (代表)

<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/>

ホームページで「かわらばん」のバックナンバーがご覧いただけます

TOPICS ① 特集 石黒病院長退任ご挨拶

常に最先端をいく病院を目指して、 変わり続けることが使命。

2019年3月をもって石黒直樹病院長が6年の任期を終え、病院長を退任します。

退任のご挨拶として、これまでの取り組みや今後の名大病院への期待をテーマに、お話を伺いました。



6年間の任期を全うし、病院長を退任することとなりました。2013年の就任以来、多くの皆さまから温かなご支援をいただきましたことを心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

この間を振り返りますと、当院は臨床研究中核病院、心臓移植実施施設、がんゲノム医療中核拠点病院などに認定され、診療・研究機能を高度に進化させると同時に、中央診療棟Bの竣工、患者用駐車場の増設などハード面の拡充にも力を入れてまいりました。加えて、病院の経営改革にも取り組んできたことが心に残っています。

特に、国際医療機能評価機関 JCI の認定取得へのチャレンジは、今後の名大病院にとって大きな財産になると考えています。この度当院は、国立大学病院で初めて JCI の認証を取得しました。

JCI では、国際的な医療の質、患者安全の厳格な審査基準を満たすことだけでなく、総合的な品質管理の手法である TQM (Total Quality Management) と同じ発想で、たえず自ら課題を見つけ改善することが継続的に求められます。医療の質の向上にゴールはあ

りません。認証取得後も、粘り強く改善へ向けて取り組み続けることで、名大病院は素晴らしい病院へ成長できると信じています。(JCI 認証の取得については、別紙特別号にも掲載しています。)

変化をリスクと捉えず、先陣を切る

大学病院は患者さんにとって最後の砦であり、常に最先端の医療が求められます。当院はそうしたニーズを見据えて、小児がん治療や心臓移植など、高難度の医療に絶え間なく取り組んでいるほか、スマートホスピタルを目指して IoT 化を推進するなど、より良い医療を効率的に提供しようと先駆的な試みを進めてまいりました。

今後患者さんや地域の期待に応えるためには、変化を恐れず、新しい潮流を自分たちで創造することが必要です。この地域では当院への信頼は厚く、ブランド力があると感じている方もいらっしゃるでしょう。しかし、ブランドは守りに入れば、すぐに陳腐化してしまいます。変わるリスクより、変わらないリスクの方が大きいと肝に銘じ、名大病院には常に先陣を切って変わり続ける力を備えてほしいと願っています。

患者さんにも医療者にも、「いつ来ても最先端」と感じていただける日本一の病院こそ、私が期待する名大病院の未来像です。患者さん、地域の皆さまには当院が目指す姿をご理解いただき、引き続きご支援いただければ幸いです。末筆ではございますが皆さまのご多幸をお祈りし、退任のご挨拶とさせていただきます。

患者さんにも医療者にも、「いつ来ても最先端」と感じていただける日本一の病院こそ、私が期待する名大病院の未来像です。患者さん、地域の皆さまには当院が目指す姿をご理解いただき、引き続きご支援いただければ幸いです。末筆ではございますが皆さまのご多幸をお祈りし、退任のご挨拶とさせていただきます。

今後患者さんや地域の期待に応えるためには、変化を恐れず、新しい潮流を自分たちで創造することが必要です。この地域では当院への信頼は厚く、ブランド力があると感じている方もいらっしゃるでしょう。しかし、ブランドは守りに入れば、すぐに陳腐化してしまいます。変わるリスクより、変わらないリスクの方が大きいと肝に銘じ、名大病院には常に先陣を切って変わり続ける力を備えてほしいと願っています。

今後患者さんや地域の期待に応えるためには、変化を恐れず、新しい潮流を自分たちで創造することが必要です。この地域では当院への信頼は厚く、ブランド力があると感じている方もいらっしゃるでしょう。しかし、ブランドは守りに入れば、すぐに陳腐化してしまいます。変わるリスクより、変わらないリスクの方が大きいと肝に銘じ、名大病院には常に先陣を切って変わり続ける力を備えてほしいと願っています。

教えて！この言葉

緑内障は、日本における失明原因の第1位となる疾患で、病名を聞いたことがある人も多いと思います。40歳以上の約20人に1人は緑内障と言われています。そこから推定される患者さんの数は460万人以上です。初期には自覚症状がほとんどないために、まだ緑内障と診断されていない患者さんが多数いると考えられています。

緑内障とは視神経障害や視野障害が進行性でおこり、治療しないと、最終的には視野が狭くなり視力も低下し失明してしまう病気です。視神経や視野の障害は、一度ダメージを受けた部分は治療しても回復しません。また自分が気づかぬうちに徐々に進行するために、早期発見、早期治療が最も重要と考えられています。

原因により緑内障も様々に分類されますが、どの緑内障であっても共通して言えるのは、眼圧(眼球の中の圧力、眼球の硬さを示す値)を十分に下げることにより、視神経・視野へのダメージを抑制することができることです。

これだけ聞くと、緑内障は怖い病気、失明する病気と考えてしまいますが、私たちに何ができるのでしょうか？

それには体の検診と同じように眼の検診も受けて早期発見、早期治療を目指すことが一番です。最近では眼圧や視野検査、カラー写真だけでなく、OCT(光干渉断層計)で写真を撮るようになってきました(図1、2)。それらを駆使して早期発見につなげることが重要です。また緑内障と診断されると治療は基本的に一生続きますから、通院しやすく、相談しやすい、かかりつけ眼科を持ち、そこで検査を行ってフォローしてもらうことも大事です。

緑内障

眼科 病院助教 牛田 宏昭

上方の視野に異常のある(下方の視神経線維に異常のある)緑内障患者さんの各検査画像



図1 カラー写真：矢印に囲まれた部分は視神経線維がダメージを受けて色調が変わっているところです。

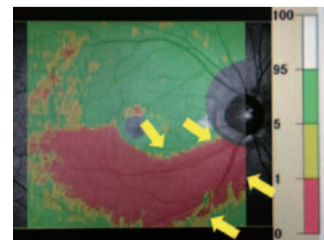
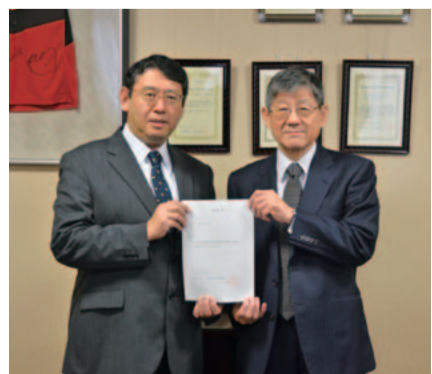


図2 OCT(光干渉断層計)：視神経線維がダメージを受けて薄くなった異常部位を、カラー写真よりも鋭敏に検出します。

名古屋掖済会病院の北川氏が特命病院長補佐に就任

昨年12月に、名古屋掖済会病院副院長・救命救急センター長の北川喜己氏が当院の特命病院長補佐に就任しました。特命病院長補佐は当院の管理・運営に関する重要事項に特化して取り組むため新設された役割です。院内外のスペシャリストが活躍します。北川特命病院長補佐は救急領域を担当し、重症度、緊急度の高い救急患者さんの受け入れや、災害拠点病院としての救命体制の強化が期待されます。



左から北川特命病院長補佐、石黒病院長

特集 TOPICS ②

専門看護師のご紹介 (急性・重症患者看護専門看護師)

SICU (外科系集中治療室) 看護師 宮崎 直美

みなさんは専門看護師という仕事を聞いたことはありませんか？初めて耳にする方も多いかと思いますが。専門看護師は日本看護協会の認定資格で、それぞれ専門分野をもち、複雑で解決困難な看護問題をもつ患者さんやご家族に水準の高い看護を提供するための知識と技術を深めた、看護のスペシャリストです。当院には現在7名の専門看護師が在籍しています。

私の専門分野である急性・重症患者看護は主に、ICU(集中治療室)や救急外来での治療を必要とする患者さんを対象とし、現在は外科系ICUに所属しています。

当院は特定機能病院として、他院では治療が難しい重症患者さんも多く受け入れています。外科系ICU



には心臓手術や臓器移植手術、難易度の高い消化器手術など大手術後の患者さんが主に入室し、複雑かつ専門性の高い術後治療を必要とします。状態を見極めて的確でスピーディーな治療を行うため、患者さんのいちばん側にいる私たち看護師には高い知識と技術が求められます。また厳しい治療の中、患者さんやご家族の辛さや不安に寄り添い、少しでも和らげ、治療に向かう気持ちを支えることも看護師の大きな役割です。外科系ICUには約80名の看護師がいます。それぞれが日々成長し、看護の力を発揮して患者さんやご家族の力になれるよう、専門看護師として教育面にも力を入れていきます。

そしてICU治療には医師、看護師だけでなくハビリチームなど多くの医療者が関わります。それぞれが専門性を発揮しつつチームとして治療に臨んでこそ、最善の治療は可能です。コミュニケーションや相互理解の架け橋となり、患者さんを中心にチームが一丸となるよう努めることも専門看護師の役割です。また院内活動として、看護師の急変時対応教育に関わったり、呼吸サポートチームとして一般病棟で人工呼吸器を装着している患者さんのケア向上にも携わっています。緊急または重症な患者さんに集中的な治療を行う超急性期病院において、看護部理念「愛しく温かく安全な看護」が提供できるよう、これからも努めていきます。

新任のご挨拶

先端医療開発部データセンター長/病院教授 安藤 昌彦

1月1日付けで先端医療開発部データセンター長、病院教授を拝命いたしました。

名大病院は、高いレベルの医療を患者さんのもとへ届けるとともに、厚生労働省や文部科学省により臨床研究中核病院や革新的医療技術創出拠点などの臨床研究拠点に指定されるなど、我が国において国際水準の臨床研究を推進するための、中心的な役割を果たしています。その中で、臨床研究



におけるデータの信頼性確保を担う者として、患者さんを適切に守りながら、臨床研究の結果を止し世の中へ伝えるよう努めます。よろしくお願ひ申し上げます。

退職のご挨拶

呼吸器外科長/教授 横井 香平



2004年(平成16年)5月の着任からほぼ15年にわたり、大変お世話になりました。呼吸器外科は主に肺がんを中心とした胸部の腫瘍の外科的治療を担う科ですが、肺がん患者さんの増加とともに、本院での手術件数も漸増し、着任当時は100件うち肺がんは84件)でありました

が、一昨年(2017年)は388件(うち肺がんは248件)の手術を行わせていただきました。病院として当科を大切に育てていただきましたことに感謝申し上げますとともに、患者さんやご家族に信頼いただける医療を提供できていたのではと思っております。今後とも呼吸器外科をよろしくお願ひ申し上げます。



退任のご挨拶

看護部長 市村 尚子



春浅くいまだ風が冷たく感じられます。平素より、皆さま方には当院の医療・看護にご理解・ご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。さて、私こと、今年度末をもちまして、看護部長

を退任いたします。看護部理念である「愛しく、温かく、安全な看護実践」の実現と浸透を目指した4年間でしたが、至らぬ点が多々あったと振り返ります。皆さま方のお力添えを心より感謝しております。本当にありがとうございました。今後とも当院の看護が「愛しく、温かく、安全な看護実践」でありますように、ご指導・鞭撻をよろしくお願ひいたします。末筆ながら皆さまのご健康をお祈りし、ご挨拶とさせていただきます。

Nagoya Disease Information Center ナディック通信



「認知症サロン」のご紹介

看護部ナディック担当 柴田 八重子

平成30年12月10日(月)、患者情報センター(広場ナディック)で、「第1回認知症サロン」が開催されました。主催は当院の地域連携・患者相談センターで、認知症や介護について、学習や情報交換の場を提供するサロンです。当院に通院中の認知症患者さんとそのご家族16人が参加され、盛況な会となりました。第1回では老年内科(同センター)准教授の鈴木裕介医師による「認知症の基礎知識—治療とかかわり方」のお話がありました。



特集 TOPICS **3**

名大病院臨床研修医のご紹介

名大病院では現在、医科歯科合わせて33名の研修医が医師としての道を歩み始めています。本シリーズでは隔回掲載で、医師を目指して日々取り組む研修医の、フレッシュな意気込みをご紹介します。

一人前を目指して 日々勉強中！



尾崎 忍 (医科研修医)

私は現在救急科で研修を行っており、当院のみならず名古屋第二赤十字病院救命救急センターでも診療に携わっています。

救急外来には重症の患者さんが来られることも多く、即時の判断が迫られることも少なくありません。そのような環境であるからこそ、安全で適切な医療を実施できるよう心掛けています。患者さんに寄り添うことができる医師を目指して精進していきたいと思ひます。



下地 和香子 (医科研修医)

私は現在1ヶ月ごとに異なる診療科をローテートしながら、夜間や休日は救急科にて研修を行っています。どの診療科でも最初はわからないことが多く戸惑いますが、先生方に質問をすると丁寧に教えてくださるのでとても勉強になっています。

救急外来では、手早く問診や診察を行いながら次に行う検査などの方針を立てることの難しさを実感しているため、1回1回の経験を無駄にせず次に活かせるように、考え方や知識を身に付けていきたいです。

多田 愛 (医科研修医)

私は現在、眼科で研修をしています。主に外来の手伝いや手術の準備などをしています。当院は開業医や市民病院から紹介されて来院される方が多く、珍しい病気を診る機会も多いです。知らないことも多く、日々勉強させていただいています。

研修医は、患者さん、先輩の先生方、同期、様々なスタッフの方に囲まれて支えられていることに感謝しながら、技術、そして心構えを学んでいきます。まだまだ未熟ですが、患者さんに寄り添える医師になれるよう日々頑張りたいと思ひます。

宮坂 紗季 (歯科研修医)

歯科医師研修では、外来での初診、麻酔科研修、開業医研修をしています。上級医の先生方の優しく時に厳しいご指導のもと、多くの経験をさせていただいています。

患者さんに、この先生に診てもらいたい！と思ってもらえる歯科医師になることが目標です。反省することが多い毎日ですが、一步一步着実に成長できるよう努力していきたいと思ひます。



※医科研修医の診療科は執筆当時

診療科レポート 「親と子どもの心療科」

親と子どもの心療科 准教授 岡田 俊

私たちは「親と子どもの心療科」は、15歳以下の子どもの発達、相談（発達障害、知的障害、遺伝性疾患など）やこころの不調（不登校、気持ちの落ち込みや不安、思考の混乱など）を抱える子どもについての相談を行っています。そのため、子どもが困っていることだけでなく、その子を取り巻く学校や仲間との関係、家族との繋がりなども把握した上で、子どもの問題を多面的に評価し、その子に必要な介入をしていきます。介入は、診断された精神疾患に対する精神療法や薬物療法といった狭い意味での治療にとどまりません。その子の日々の暮らしがよりよいものになるよう、子育てをする家族と対応の工夫を相談した

り、学校や様々な支援機関との連携を模索することもあります。私どもが児童精神科ではなく、「親と子どもの心療科」と名乗っているわけもそこにあります。精神科への受診、特に子どもの受診となりますと敷居が高く感じられ、「病院を受診することだろうか？」と迷われることもあるでしょう。しかし、そもそも悩みに画一的に測れるような重さや深さはないのです。私たちはご縁をいただいたすべての子どもやご家族との出会いが、問題解決の糸口となり、子の成長・発達、家族の安寧へ至る大切な一歩となるよう、日々診療に励んでおります。どうぞ気軽に受診してください。

名古屋市内で震度6強の大規模地震が発生し、当院に傷病者が続々と押し寄せるといふ想定で、平成30年11月29日(木)に名大病院災害訓練が行われました。災害対策本部の設置訓練、本部への被害状況等の報告訓練、傷病者の受入救護訓練を実施しました。

参加者は医師、看護師、医療技術者、事務職員の約200名であり、傷病者の受入救護訓練では、名大医学部保健学科及び医療系専門学校約100名が模擬患者として、ムラージュ(外傷などを模造したゴム・ラテックス製の特殊メイク)を施して参加しました。

また、今回は停電中の院内緊急医療スペースに必要な電源の確保のため、中部電力株式会社の協力に基づき、低圧発電機車による照明等への応急送電を実施しました。当院は中部電力株式会社と平成30年2月に災害連携協定を締結しており、連携訓練を通して発災時の要請行動を検証しました。

南海トラフ地震の発生確率は近年さらに高まっており、災害拠点病院である当院は災害医療体制を多角的に整える必要があります。このような災害訓練は当院にとって不可欠であり、毎年訓練を継続することで、災害への備えをより充実したものにしていきたいです。



▲低圧発電機車による応急送電の様子



▲傷病者の受入救護訓練の様子

平成30年度名大病院災害訓練を実施

■ ボランティアさん募集

当院ではボランティアさんを募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。

★ ボランティアホームページ
<https://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/recruit/volunteer/>
 『名大病院 ボランティア』で検索♪



特定基金 医学部附属病院支援事業へのご協力をお願い

当院では本事業を通じて、診療環境の充実、患者さんへのサービスのさらなる向上、先進的な臨床研究の推進を進めてまいります。皆さまのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

詳細は、ホームページまたは外来棟各階に置かれているパンフレットをご覧ください。
 URL : <https://www.med.nagoya-u.ac.jp/kikin/hosp-kikin/>

QRコードでもアクセスできます！



小さな体に寄り添い守る。最前線で闘う小児医療の現場に光をクラウドファンディングプロジェクトへのご支援のお願い

当院は、小児科、小児外科を中心に、多くの子どもの診療を行っています。重篤な患者さんや稀少疾患の患者さんなど治療が難しい患者さんも多く、治療のために全国から子どもたちが来院しています。また当院は国が



指定した小児がん拠点病院の一つであり、その中でもトップの評価を受けています。そのため小児がんの患者数は日本で最も多く、「最後の砦」としての役割を担っています。

当院で小児医療に関わる皆が、「子どもたちを早く元気にしたい」「子どもたちを笑顔にしたい」と強く心に思い、日々子どもたちに向き合っています。しかし、診療収入や国の補助金だけでは小児医療を充実するための資金が充分とは決して言えないのが現状です。小さな体で病気に果敢に挑む子どもたちのために、このプロジェクトで

は次の3つの小児医療に関連した資金援助をお願いしております。

皆さまの本プロジェクトへの温かいご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



クラウドファンディングとは？

あるアイデアやプロジェクトを達成するために、インターネットなどを通じて世の中に呼びかけ、共感した人から広く資金を集める方法です。定められた期間までに目標金額が集まった場合、皆さまのご寄附をプロジェクトのために活用します。目標金額に達成しなかった場合、寄附金は全て寄附者さまに返金されます。

ご寄附についてはこちら

目標金額：2,500万円 (プロジェクト合計)

寄附金受付：2019年5月31日 23時まで

方法：銀行振込又はクレジットカード (銀行払込票は外来棟各階に置いてあります)

寄附金額：3,000円から

詳細はプロジェクトホームページをご覧ください。
https://readyfor.jp/projects/nagoya_u_hospital



名大病院 レディーフォーで検索

問合せ先：
 名古屋大学医学部・医学系研究科 経営企画課
 TEL：052-744-2429
 FAX：052-744-2881

1. 新生児・小児の搬送用ドクターカー購入

当院は年間150件ほど、出生直後の新生児や妊婦の救急搬送を受け入れています。ドクターカーを所有しておらず市の救急車を利用しています。

1秒でも早く安全に患者さんの元に駆けつけるために、新生児と小児を運ぶ専用のドクターカーが必要です。



現在はタンカに新生児を載せ、医療用タクシーで運ぶこともあります。

2. 小児医療器具の購入

当院では小児患者さんの手術を年間550件、新生児手術は80件以上行っており、体の負担が少なく傷跡が目立たない、体にやさしい内視鏡(低侵襲手術)の手術件数は日本一です。しかし子どもに特化した手術器具の充実がまだ至っていないのが現状。子どもの体のサイズにあった器具を購入することで、傷口も抑えた、最善の手術が行えます。



手術風景。通常は大人用の器具を使うことが多いです。

3. CT・MRI のこどものための装飾

小児がんで闘う子どもたちが避けて通れないのがCT、MRI、PET-CTなどの機械を使った検査。当院では年間約3800人の小児患者さんがこの検査を受けています。

CTやMRIなどの部屋は無機質な空間が広がり、怖がって泣き出してしまいうも多くなります。そんな子どもの不安を少しでも取り除けるよう装飾を行いたいと思います。



現在検討中のデザイン。少しでもワクワクできるような空間にできれば

健康講座

手術前には筋肉を鍛えましょう!

消化器外科一寄附講座教授 横山 幸浩

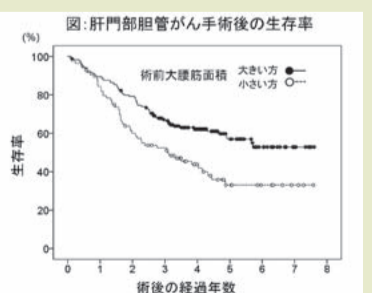
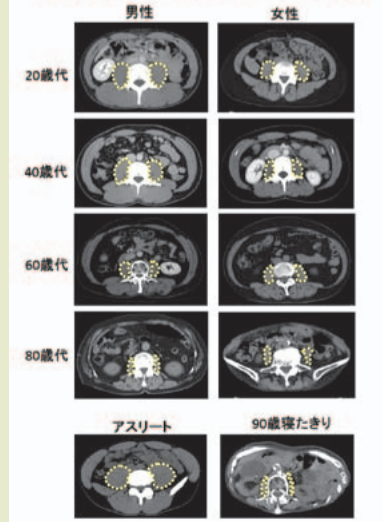
われわれの筋肉量は体重の30~40%もあります。筋肉には「からだを動かす」という働きだけでなく、「タンパク質の貯蔵」という重要な役割があります。また筋肉量は年齢とともにどんどん低下していきます。下の写真は男女別、各年代別の第3腰椎レベル(お臍のレベル)での代表的CT画像です。黄色の破線で囲った部分が大腰筋と呼ばれる筋肉ですが、これが年代を追うごとに明らかに減少していることがわかります。

消化管の手術はお腹を大きく開けて臓器をはがしたり切ったりすることが多いた

め、からだにとって大きな負担(侵襲)になります。手術によって傷ついたからだは、自分のちからにより修復されていきますが、その過程で大量のタンパク質を必要とします。筋肉はそのタンパク質の重要な供給源になります。

肝門部胆管がんという病気に対して、大量肝切除術という肝臓の半分以上を切除する手術を行った患者さんを対象に、手術の前に撮影したCT画像から大腰筋面積を測定し、大腰筋面積が小さな方と大きな方で術後の合併症がどう違うのかを調べてみたところ、大腰筋面積が小さな方、すなわち筋肉量が少ない方では、術後合併症の発生率が明らかに高率でありました。そればかりではありません。がんの手術後にはどれだけ長く生存できるかが問題になりますが、大腰筋面積の小さい方では術後の生存率が明らかに低いこともわかりました(図)。このような結果は大腸がん、膵臓がんなど他の多くのがんでも確認されています。このような観点から手術前にはできるだけ筋肉量を増やして、手術の侵襲に耐え得るからだをつくりあげることをおすすめします。

写真:第3腰椎レベルでの大腰筋の大きさ



ミニニュース

「院内コンサート」を開催しました

中央診療棟A2階ピアノ広場にて、平成30年11月16日(金)に「Satisfy My Soul Gospel Choir 中部」、12月6日(木)に「名大病院医療スタッフ」、12月17日(月)に「ラルゴ」の方々によるコンサートが、それぞれ開催されました。冬らしい曲やクリスマスソングなどの歌、ピアノ演奏や合奏で、皆さんが楽しいひとときを過ごしました。



▲11月16日に行われたコンサート



▲12月6日に行われたコンサート



▲12月17日に行われたコンサート



禁煙のお願い

患者さんの健康をサポートすべき医療施設として、病院敷地内の全面禁煙を実施しています。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

国立大学病院 初

名大病院がJCI 認証を取得しました!

名古屋大学医学部附属病院は、平成31年2月23日付けで、国際的な医療施設評価認証機関であるJCI（Joint Commission International）の認証を取得しました。JCIとは、1994年に米国の病院評価機構の国際部門として設立された非営利組織で、「医療の質」と「患者安全」を国際的な基準で評価することを目的とした機関です。厳格な審査基準を有し、世界で最も難易度の高い認証機関として知られています。現在、全世界で1082施設が認定されており、日本の大学病院では4施設目、**国立大学病院では初めての認証施設**となります。認定は平成31年2月23日から3年間で、以降3年ごとに再審査を受け、再度認定を受けることで認証が更新されます。

本院は、平成31年2月18日から22日の5日間、5名の外国人審査員による現地調査を受け、国際患者安全目標、患者の評価とケア、感染の予防と管理、ガバナンスとリーダーシップ等、実に16領域1270項目に及び評価項目について厳正に審査されました。

この度の「JCI認証」の取得により、国際的な医療の質、患者安全の基準を満たした日本初の国立大学病院となりましたが、認定後も改善活動を継続し、より高い水準の医療を提供できるよう、日々改善に取り組んでまいります。



この度、名大病院はJCI認証を受けることができました。これは米国シカゴに拠点をもち、国際機関が認証するものです。安心で高度な医療を提供するための基盤として、国際的な基準に従って病院が運営されていることを証明するために、このJCI認証を受けました。実はこの認証を受けるために2年半準備してきました。この活動に参加した職員の方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。

JCI認証の審査範囲は広く、医療安全、設備の保守状況、災害時の医療確保なども含まれています。今後、当院は認証の更新に向けて、運営管理について恒常的な評価と改善が求められます。病院にとって質向上の取り組みは不可欠です。その質向上を病院一丸となって追求するために、この認証を受けたのです。質向上の活動に終わりはありません。当院の職員はこの活動を通じて、明日はさらに良い病院に変わっていくことを信じています。そして皆さまにもっと良い医療を提供できるように日々努めていくことを、改めて誓いたいと思います。



JCI 認証 取得に寄せて

石黒直樹病院長ご挨拶

最難関の国際審査、JCI 認証を受けて

医療の質・安全管理部 教授 / 病院質向上推進本部長 長尾 能雅

当院がJCI認証を目指した理由は、真の意味で、患者さん中心の質の高い医療を提供し、当院の基本方針である「安全かつ最高水準の医療の提供」を実現したいと考えたからです。先端医療についてはもちろんのこと、それらを支える当院の安全文化や改善活動が、世界の中でどのくらいの水準にあるのか、評価を受けたいと考えました。

受審では、5日間にわたり、「患者中心の医療が展開されているか」、「課題を自ら見つけ、改善する仕組みがあるか」、「医療事故を防ぐための確認や手順が完全に守られているか」などについて、徹底的に点検を受けました。外来棟や病棟、手術室などはもちろん、厨房や、エネルギーセンター、コンビニなど、あらゆる部署が審査対象となり、患者さんや、医学生にもヒアリングが行われました。

実は、JCIの認証は「日本の国立大学病院には不可能だ」とささやかれていました。大学病院は独立した多数の専門チーム（各医局、看護部、薬剤部など）の集合体であることから、部門間の連携が取りにくく、安全確保や改善のための仕組みづくりが困難など、多くの課題が指摘さ

れていたからです。また、毎年数百人の職員が入れ替わることも大きな弱点となります。しかし当院は、石黒直樹病院長、松下正教授（JCI受審統括会議長）のリーダーシップの下、2年以上にわたって準備を進め、職員一丸となって課題を一つずつクリアし、この度、大きな目標に到達しました。国立大学病院初となる今回の認証は、徐々に増えている他国からの患者さんの安心にもつながりますし、日本のガラパゴス化を回避し、ひいては我が国の医療全体への信頼にもつながると考えています。

医療の質向上や安全の確保は、終わりのない旅に例えられます。名大病院という船は、多くの患者さんを乗せてドックを離れ、安全・安心に向けた長い航海を始めたといえます。JCIでは、3年ごとに更新のための審査が行われます。今後も、JCIというパートナーと共に、日本を代表する国立大学病院として、さらなる努力を続けて参ります。

